

第2節 言語と映像の接点を探る—国語科メディア・リテラシー教育の一環として

1 国語科におけるメディア・リテラシー教育

高度情報化が急速に進展し、子どもたちを取り巻くメディアの世界がますます広がる様相を呈する中で、いま教育の分野でメディア・リテラシーに対する関心が高まっている。国語教育においても多くの研究と実践が展開され、メディアとことばとの関係に着目しつつメディア・リテラシーを育てる国語教育の可能性を追求することが、重要な課題として意識されるようになった。本節では子どもたちに特に影響の大きい映像を取り上げて、国語科におけるメディア・リテラシー教育に関する学習指導の方法について、高等学校での実践に即して論述することにした。

国語科におけるメディア・リテラシーの授業を考える前に、まず「メディア・リテラシー」という用語の意味するところを確認すると、菅谷明子の「メディアが形作る『現実』を批判的（クリティカル）に読み取るとともに、メディアを使って表現していく能力」¹というとらえ方が代表的なものであるといえよう。多様なメディアから発信される情報を的確に受け止めつつも、それを鵜呑みにせず的確かつ批判的にとらえる「理解」の能力と、理解を基盤として様々な情報を発信する「表現」の能力とをともに組み込んだ総合的な能力として把握することができる。

子どもたちをめぐるメディアの環境が多様化するに及んで、国語教育は文字メディアばかりではなく、映像を中心とした多様なメディアに目を向けなければならなくなった。さらに、メディアから発信されるおびただしい量の情報をそのまま受け止めるのではなく、何が正しい情報かということ、そして自分にとって何が必要な情報なのかということを常に意識することが求められている。メディア・リテラシーを話題にする際に、「クリティカル」という用語がよく用いられる。この「批判的」ということを否定的なニュアンスでとらえるのではなく、客観的・論理的で偏りのない建設的な方向性を目指すという意味合いから把握しておきたい。そして何よりも、国語科という教科の領域においてことばの学びを育てる方向を目指すことが、メディア・リテラシーの授業構想において最も重要なことである。

本節では特に多様なメディアの中から映像を取り上げて、言語と映像の接点を探るという観点から授業を構想し、それをわたくし自身の高等学校における実践に即して紹介することにした。メディア・リテラシー教育の一環として、以下に提案するような視点を今後国語教育に積極的に取り入れてみたいと思う。

2 言語の表現と映像の表現—文化庁の調査結果から

「ハリー・ポッター」シリーズや「指輪物語」などのファンタジーがよく読まれている。これらはともに映画化されたことから、文字と映像という複数のメディアによって享受され、話題になったものである。映画館や書店には映画の原作のコーナーがあって、映画化された文学作品や映画をノベライズした本が並んでいる。そこには、原作と映画をともに

鑑賞するという姿勢を見ることができる。

もちろん文学と映像は本来別物であり、どちらが表現として優れているのかという論議は決して有効ではない。本節で取り上げる授業は、文学と映像のいずれが優れているかという問題を扱うことが目的ではなく、両者を比較検討してそれぞれの特徴を明らかにしたうえで、映像とは異なる言語表現の本質に迫ることをねらいとしたものである。

高校生の世代が自主的な読書をしないうという傾向はいまに始まったことではないが、国語関連の実態調査として文化庁文化庁国語課が公表した調査結果報告²を引用する。この調査は2002年11月に全国の16歳以上の男女2200人を対象に実施したもので、調査項目の中には読書に関する項目が含まれている。特に1か月に何冊くらい本を読むかという調査では、「全く読まない」と回答した人の数は、全体の37.6%に及んでいる。高校生の世代を含む「16歳～19歳」の集計では、男性で38.2%、女性で31.6%が「全く読まない」と答えている。さらに「読書をする人の現状」に関する調査では、「読書をする人の数は減っている」という回答が60.6%と約6割にも及んでいる。学習指導要領で学校図書館の活用が求められ、現場では「朝の読書」や「読書へのアニメーション」などの様々な読書指導の試みも積み重ねられているわけだが、調査結果からは学習者が進んで読書へと向かう姿は見えにくい。テレビでは地上デジタル放送が開始され、携帯電話の機能も多様化して手軽に映像を扱うことが可能になったという現状から、学習者の関心は書物よりも、テレビやビデオ、DVD、そしてインターネットなどの映像に多く向けられるようになったことは事実である。

ところで文化庁の調査結果を見ると、読書に関する項目としてさらに「読書をすることの良いところ」に関する調査結果も公表されている。それは「読書をすることの良いところは何か」という質問が設定され、13の選択肢の中から3つまでを選択して回答するというものであった。この調査結果で最も多かったのは、「新しい知識や情報を得られること」で55.3%に及んでいる。ここで注目したいのは、続いて多かったものが「感性が豊かになること」39.0%、「感動を味わえること」35.1%、「創造力や空想力を養うこと」28.8%と続くことである。これらの選択肢の内容は主に文学作品によってもたらされるものと考えられることができる。読書に関しては、文学作品に対する期待が大きいということもまた明白になった。そこで特に文学作品を教材として、映画化された映像作品を紹介しつつ、言語表現と映像の表現を比較することによって、それぞれの表現の特徴を明らかにしたうえで、文学作品を読むための今日的な課題を検証するという授業を提案することにした。

3 授業の実際—「泥の河」を通して文学作品の映像化を考える

今回紹介する授業で対象としたのは高校2年生で、科目は「国語表現」である。わたくしは早稲田大学系属早稲田実業学校高等部で2003年度の「国語表現」を1クラス（45名在籍、男女共学）担当したが、単位数は1単位で週に1時間の授業であった。以下に具体的な実践に即して論述する。

教材としては、宮本輝の『螢川』（筑摩書房、1978.2）に収録された「泥の河」を選んだ。「泥の河」は第13回太宰治賞を受賞し、宮本輝の文学的出発を彩る初期の代表

作で、「螢川」「道頓堀川」とともに「川三部作」と称されている。舞台は戦後間もない大阪の河口で、大衆食堂を営む家の息子信雄と、舟の上で生活をする少年喜一との出会いと別れの物語が展開する。子どもの世界と大人の世界とがそれぞれ描き出されて、大人の世界を垣間見た信雄の戸惑いと成長を読み取ることができる。

この小説を小栗康平が映画化したのが、小栗は「泥の河」によって映画監督としての地位を不動のものにした。すなわち「泥の河」は、原作者の作家にとっても、映画化を試みた監督にとっても、ともに世に出るきっかけとなった貴重な作品ということになる。文学の表現と映像の表現を比較するという授業の教材として適切であると判断し、今回教材化することにした。折しもNHKの「人間講座」で、小栗康平監督による「映画を見る眼」が放映されていた（2003年6月～7月）ことから、この講座のテキスト³とテレビ講座自体を教材として使用することができるという思いもあった。

授業において教材としたのは、信雄と喜一が出会って、信雄が初めて舟の家を訪れる場面である。この場面に関連して、映画の脚本を担当した重森孝子によるシナリオ（『シナリオ』1981.6）と、小栗康平の講座「映画を見る眼」のテキスト（日本放送出版協会、2003.6）、およびそのテレビ講座を収録したビデオ、そして映画「泥の河」のビデオその他を準備した。授業の配当時間は3時間とした。

まず第1時に、「泥の河」の梗概を紹介する。インターネットの記事を引用して、要点を絞って短く紹介することにした。続いて教材として原作の一部をコピーして配布し、学習者に読ませる。信雄と喜一の出会いを中心とした小説の初めの場面である。特に表現という観点から、学習者が発見した点を中心に取り上げて授業を展開する。その後で原作と同じ場面を、今度は重森孝子による脚本を配布して読ませることにした。原作の小説の表現と比較をして、共通点と相違点とに分けてそれぞれ読み取るように指示をする。授業時間内に終了しないところは、次回までの課題とした。

第2時には、原作と脚本の具体的な比較を実施する。特に場面を限定して検討することにした。話題にしたのは次のような場面である。なお引用はすべて前述の資料による。

信雄はしげしげと舟の家を見た。（中略）やがて屋根の一隅に陽光がこぼれ落ち、朽ちた木肌をあぶり始めた。信雄は川に視線を移した。生まれてからこのかた、ずっと自分の傍を流れつづけている黄土色の川が、なぜかきょうに限って、ひどく汚れたものに思えた。

原作ではこのように表現されている場面が、脚本では、次のようになっている。

信雄、橋の上から、宿船を見ながら歩いている。／熱のひいたあとのてれんとした足どり。／信雄、橋のたもとの壊れかけた階段を降りる。／途中で座って、しげしげと船を見ている。／廃船を改造して屋根をつけたものである。

以上のような箇所を比較を通して、小説とシナリオそれぞれの表現の特徴を考える。一読して明らかなように、小説では信雄の内面の心情が「思えた」という言説によって描かれている。これに対して脚本の方は、一貫して人物の外のみが描かれることになる。映像となるのはあくまでも人物や事物の状況であって、映像では内面をそのまま表現することはない。表現する際には、例えば人物の表情や仕草を通して描くことになる。

その点について、監督の小栗康平自身が「映画を見る眼」というテレビ講座の中で分かりやすく解説している。授業では、その講座のテキストの一部を印刷して紹介し、さらに

2003年6月9日に放送された講座「サイズとアングル」を録画したビデオを紹介した。次に小栗康平の解説の一部を、テキストから引用する。

会話以外のところを、小説では地の文、脚本ではト書とっています。宮本さんの小説では、地の文で信雄はこう思えた、このように思えたと書いています。人物の内面描写です。(中略) 脚本では、場所、事物のようす、ありさま、そして行為が書かれています。ト書と会話はくっきりと分けられて、干渉し合いません。どんな気持でというように、但し書きがつくことはありますが、内面は描かれません。映像は人が考えていること、思っていることをそのまま写せません。

学習者による様々な意見交換の後で、このような指摘を取り上げ、さらにビデオの映像によって小栗の考え方を直接紹介することにした。

続く第3時には、これまでの授業の復習として要点を整理し、さらに続けて脚本をもとに映像を撮影する段階を考えることにした。小栗のテレビ講座では、扱った場面のカットが15カット紹介されている。例えば最初の3カットは、テキストでは次のように紹介されている。

- C1 信雄、階段を下りてきてしゃがむ。
二十二秒。
- C2 誰もいない舟のようす。
四秒。
- C3 信雄、見ている。
二秒半。

授業ではそれぞれのカットと、テキストに掲載された対応する映像の写真とを参照して、シナリオから実際の映像が撮影されるまでの段階を簡単に追うことにした。そのうえで、授業で扱った場面を中心に映画の冒頭のシーンを鑑賞する。

最後に文学作品の映像化というテーマについて、感じたことや考えたことを自由に意見交換して、授業を総括した。3時間という短い時間配当ではあるが、言語と映像の比較を通して、それぞれの表現の特質を明らかにするという授業の目標は達成されるものと思われる。

4 メディア・リテラシー教育の課題

本節では多様なメディアの中から、子どもたちが特に強い関心を示す映像を選択して、言語表現との比較を通してその特質を考える授業を紹介した。今回わたくし自身が高等学校の現場で担当したのは1989年版学習指導要領の「国語表現」であったが、1999年版の「国語表現Ⅰ」もしくは「国語表現Ⅱ」においても扱うことができる内容である。さらに「読むこと」の領域により重点を置く形で、「国語総合」や「現代文」において扱うことも工夫できよう。

今回提案した授業は、メディア・リテラシー教育の一環という意味合いも含まれている。それは、単に映像を鑑賞するという段階にとどまることなく、言語との比較という観点から映像表現の様々な特質を検証したことによる。言語との比較という観点は、いうまでもなく国語科という教科のカテゴリーを意識したものである。言語表現との比較を通して、

映像表現および言語表現それぞれの特質を理解することが授業の目標となった。

テレビに代表されるように、映像は多くの場合一方的に配信される場合が多い。わたしたちはともすると受動的な姿勢に終始して、ただ単に発信される映像を受け入れがちである。そのような傾向に歯止めをかけて、常に客観的な視点からクリティカルに受け止めるための一つの方法として、言語表現との比較という視点は有効である。今回提案した授業を、メディア・リテラシー教育の一環として位置付ける根拠はそこにある。

また今回は特に文学作品の映像化を考えたわけだが、もちろんより身近なメディアとして、新聞とテレビのニュースを比較するという実践が行われている。いま現場ではメディア・リテラシーに関する授業が流行して、新聞やテレビのニュースを教材とした授業が活発に実践されるようになった。ただし先に引用したように、文化庁の調査において「読書をするための一つの良いところは何だと思いますか」という質問に対して、「感性が豊かになること」や「感動を味わえること」、および「創造力や空想力を養うこと」などが高いパーセンテージで挙げられたことから、文学作品に対する大方の支持と期待を見ることができている。

文学作品の詳細な読解が批判されたことから、1999年版高等学校学習指導要領では文学教育の位置が若干後退したような側面も伺える。たとえば選択科目の「現代文」では、「現代の社会生活で必要となる実用的な文章」の教材化が求められた。もちろん文学のみに偏向するという姿勢は避けなければならないが、国語科の授業において文学作品を扱うことにためらいを覚えることはない。今回はメディア・リテラシーの授業の一環として位置付けてみたわけだが、もちろん文学教育の一環として扱うことも可能である。メディアから発信される情報をクリティカルにとらえるはずのメディア・リテラシーが、逆に情報に振り回されるようになるとしたら、それは本末転倒になってしまうだろう。

国語科におけるメディア・リテラシー教育が活発に実践されるようになったという現状を歓迎しつつも、そのことによって学習者がさらに本を読まなくなり、文学作品の面白さに出会う機会が減少するという事態はぜひとも避けたいという思いがある。今回提案したのは言語と映像の比較を通して、両者の接点を探るという授業であった。たとえば本節で紹介したような試みをメディア・リテラシー教育の一環として積み重ねることによって、国語科が本来担うべき側面を維持しつつ、高度情報化時代の要請にも応える国語教育を実現することができるのではあるまいか。以上のような方向から、実践を着実に積み重ねたいと考えている。

注

- 1 菅谷明子『メディア・リテラシー—世界の現場から』（岩波書店、2000、8）。
- 2 2003年3月に公表された『平成一四年度国語に関する世論調査』。
- 3 後に『映画を見る眼』（NHK出版、2005、6）として刊行された。